



ORIGINAL HP



R-GIRO HP

# 高齢者の認知的コミュニケーション の支援に向けた 学際的研究拠点の形成

最終報告用PPT資料

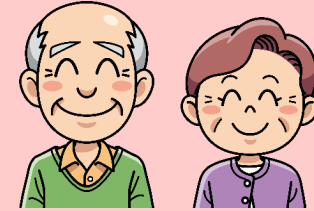


# (A) プロジェクト概要

# 拠点名：第Ⅳ拠点（高齢者の健康増進と生き甲斐の追求）



林勇吾・総合心理学部（プロジェクト/グループリーダー）  
木村朝子・情報理工学部（グループリーダー）  
泉朋子・情報理工学部（グループリーダー）



## 高齢者の認知的コミュニケーションの支援に向けた学際的研究拠点の形成

### グループ 1

認知モデルの構築と  
傾聴手法の検討

G1: 林勇吾 (総合心理学部)

G1T1: 心理モデルによる健康状態の理解  
G1T2: センサーを用いた健康状態の理解

G1T3: マルチモーダルによる回想記憶と説明活動の促進  
G1T4: VR/ARを用いた知覚・認知の拡張

メンバー数：20名  
4チームで構成  
(若手研究員：3名、  
後期課程院生：1名、  
前期課程院生：9名)

### グループ 3

記憶の想起を促す  
システムの開発と検証  
G3: 泉朋子 (情報理工学部)

メンバー数：20名  
3チームで構成  
(若手研究員：2名、  
後期課程院生：1名、  
前期課程院生：10名)

G3T1: 自伝的記憶のモデル化と評価  
G3T2: 記憶の想起を促すシステムの開発  
G3T3: 記憶の想起に有用なデータを検討

### グループ 2

VR/MR環境における  
インタラクション分析  
G2: 木村朝子 (情報理工学部)

メンバー数：19名  
4チームで構成  
(若手研究員：2名、  
前期課程院生：10名)

G2T1: 身体動作を用いたインタラクション方法の研究  
G2T2: 触覚を用いたインタラクション方法の研究  
G2T3: 複数の感覚を相互に融合・補完するインタラクション方法の研究  
G2T4: 3つのインタラクション手法が認知機能に与える効果の検証

連携

組織  
体制

心理学と情報工学の異分野融合、学部間の学術的な連携・持続的な関係構築を目指します

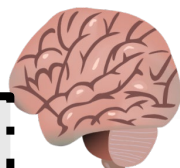
(B) プロジェクトとしての  
達成内容

# 研究の目的/目標

成果

## 現状の課題

- ・ 全国の認知症患者は、862万人と増加傾向にあるが、支援スタッフの人材不足
- ・ 認知症には、回想法や運動療法などの予防が有効
- ・ 人的サポートに頼らない持続的な支援に向けた高齢者支援研究の研究は未発達



GOAL

高齢者の傾聴と回想による心的健康の促進

システムベースアプローチ

認知支援システムの開発

- ・ デジタルコンテンツの記録
- ・ 回想記憶のモバイルアプリ

傾聴対話システムの開発

- 人工現実感 (Virtual Reality; VR)
- 複合現実感 (Mixed Reality; MR)

モデルベースアプローチ

高齢者の認知行動のモデル化

- ・ 健康状態の把握・検知
- ・ 認知機能のメカニズム

傾聴コミュニケーション手法

- 傾聴時の説明活動の促進法
- マルチモーダル情報の刺激



高齢者疑似体験教材



認知科学

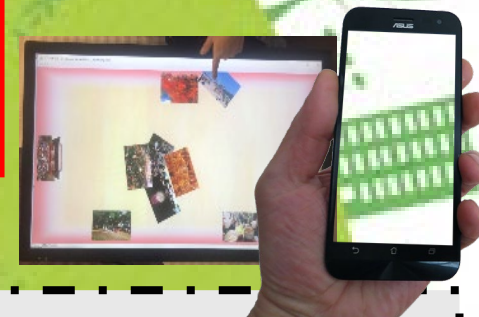
対話実験

データマイニング

人工知能

心理学

記憶想起・説明活動



現状



高齢者

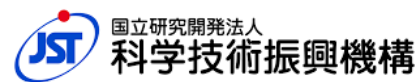
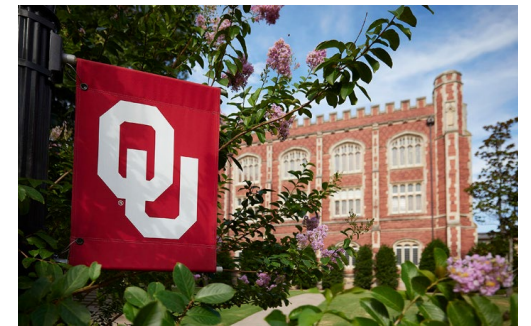
傾聴者

## 研究の目的/目標

- ・ 人とITによる共生社会の構築
- ・ 人手に頼らない持続的な認知的支援の実現
- 高齢者の認知機能の理解・状態を検知するモデルの開発
- 仮想現実VRや複合現実MRを利用した支援システム
- 認知モデルによる記憶想起をトリガーするインタフェースシステム

# 今後（5～10年）の目標

- 統合モデルのアップデート
  - 心理学実験を蓄積
  - 心理学×情報工学による認知モデルのアップデート
- 社会実装
  - 高齢者施設での継続的な利用
  - 全国の施設での展開
- 国外の大学・施設での展開
  - 米国オクラホマ大学との共同研究（2026年度から実施）
- 大型予算への申請
  - JST: RISTEX
  - JSPS：学術変革領域（A・B）
  - JSPS：基盤（A）



# (C) 特記事項

# 組織作りと成果

- 組織

- 学際的研究拠点：総合心理学部・情報理工学部・食マネジメント学部
- 学内外の組織との連携：立命館大学・京都大学・静岡大学・岡山県立大学など
- 教員・若手研究者・後期課程院生による分野横断的な共同研究体制

- 成果：文理融合型の研究の例

- G1×G2によるコラボレーション

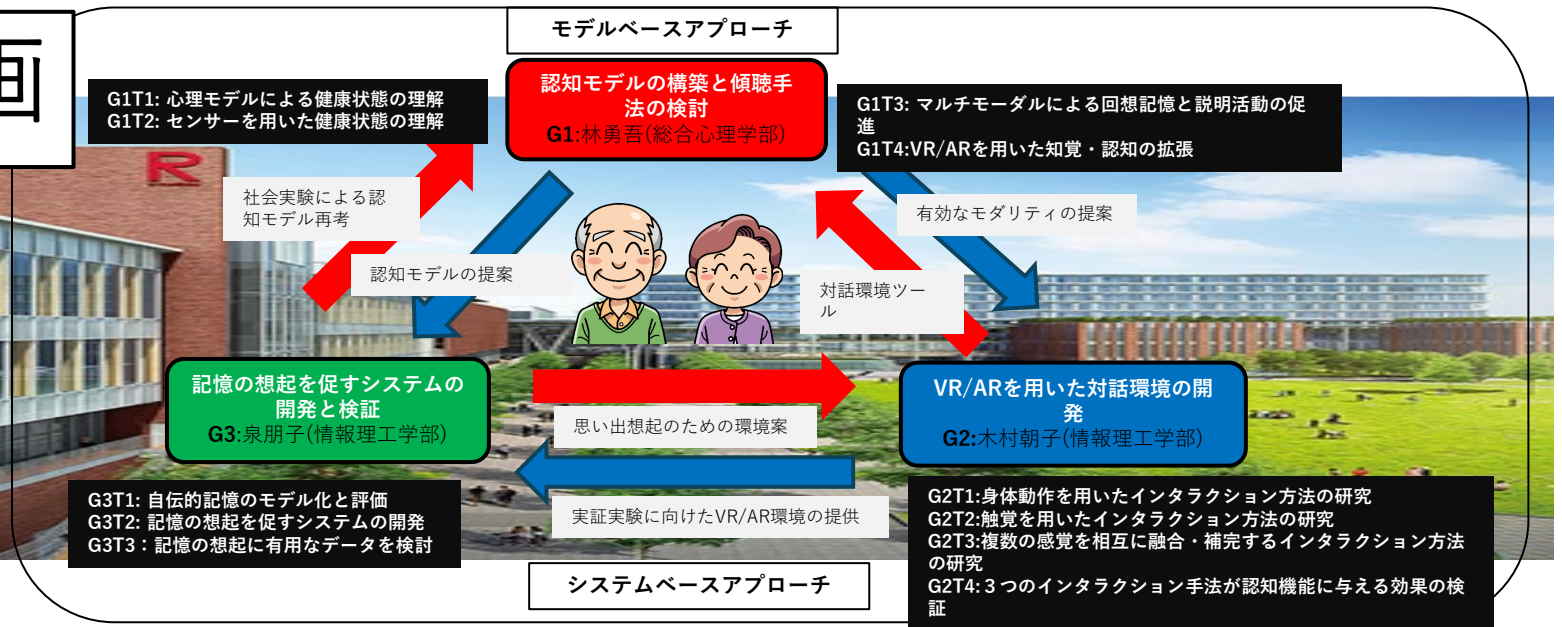
- テーマ：VRヘッドセットを用いた協調的コミュニケーションの実験的検討
- 従事者：渡邊・下條・林・木村
- 発表：渡邊咲花, 下條志蔵, 木村朝子, 林勇吾「協同時における他者のスキーマがシンクロナイゼーションに与える影響」, 電子情報通信学会, **ヒューマンコミュニケーション基礎 (HCS) 研究会**, (2026年1月)

- G1×G3

- テーマ：LINEを用いた傾聴カウンセリングアプリの開発と心理学実験
- 従事者：大津・下條・西田・林
- 発表：大津 耕陽・木内 敬太・林 勇吾(2024), 高齢者を対象としたチャットロボットによる対話型の心理的支援：解決志向アプローチを用いた実験的検討, **情報処理学会論文誌**, 651151-166
- 受賞：情報処理学会論文誌特選論文賞

# 研究計画

# 進め方

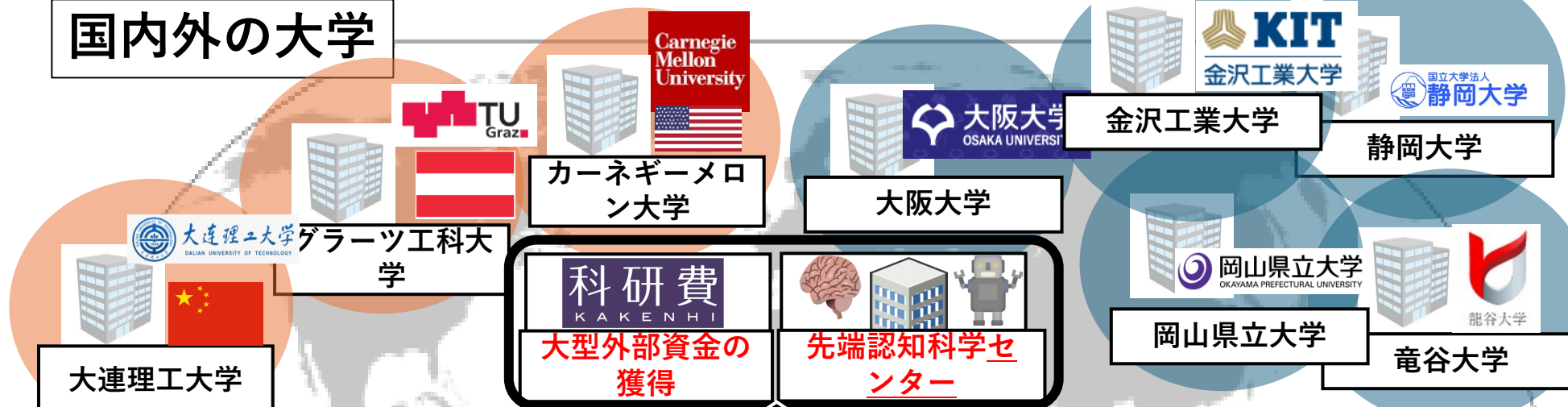


	Team	Leader	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
健康状態のモデル化と傾聴支援手法のデザイン (林グループ)	G1T1	山本博樹		高齢者を対象とした会話分析	会話分析に基づくモデル構築	アプリを用いた実証実験によるモデルの評価	
	G1T2	島川博光		高齢者を対象としたセンシングによる行動分析	機械学習によるモデル構築		実証実験によるモデルの評価
	G1T3	林勇吾		言語情報による傾聴ファシリテーション方法	マルチモーダル情報によるファシリテーション方法		大規模な実証実験による手法の評価
	G1T4	木村朝子		AR/VRを用いた知覚・感覚情報提示手法の検討			大規模な実証実験による手法の評価
VR/MR環境におけるインタラクション分析 (木村グループ)	G2T1	柴田史久	手、足、アイジェスチャを利用したインタラクションの設計	手、足、アイジェスチャを利用したインタラクションの実装	手、足、アイジェスチャを利用したインタラクションの評価		
	G2T2	野間春夫	人の触覚認識課程モデルの構築	人工触覚センサモジュールの設計		人工触覚センサモジュールの実装と評価	
	G2T3	木村朝子	MR環境における視覚・触覚の融合の設計・実装	VR環境における視覚・移動感覚の融合の設計・実装	その他の感覚を融合するインタラクションの設計・実装		
	G2T4	林勇吾				3つのインタラクション手法が認知機能に与える効果の検証	グループ1, 3の記憶想起システムとの連携
記憶の想起システムの開発と効果検証 (泉グループ)	G3T1	林勇吾		記憶の蓄積手法の検討	記憶のデータの蓄積		実証実験による手法の評価
	G3T2	西原陽子		想起に効果的な情報デザインの検討と評価	インタラクションシステムの構築と評価		実証実験による手法の評価
	G3T3	泉朋子		想起に有用なデータの検討と評価	記憶に関するデータの統合手法の提案		実証実験による手法の評価

# 異分野融合・研究拠点形成

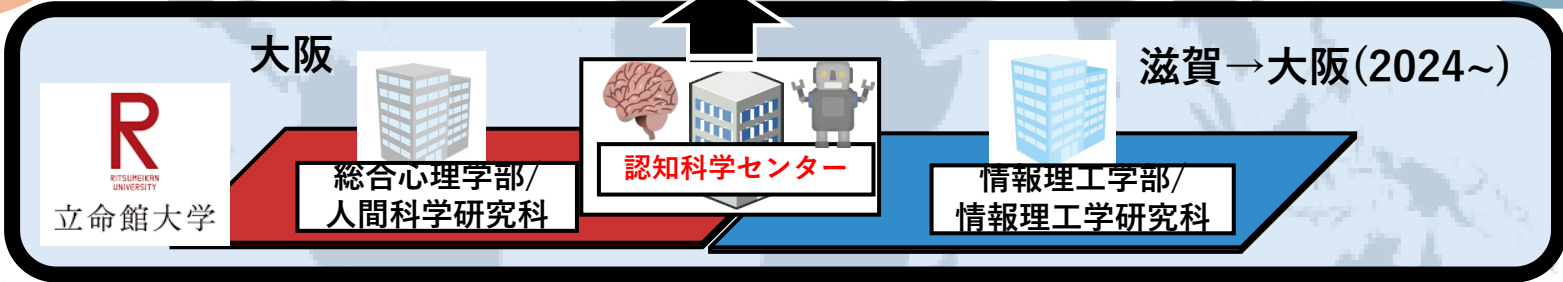
(グループ間、学内・学外研究機関との異分野融合および研究拠点形成の①現状、②終了時点の目標、③終了後の将来構想)

## 国内外の大学



**科研費 (KAKENHI)**  
大型外部資金の獲得

**先端認知科学センター**



- ・ 実験心理学
- ・ 生理心理学
- ・ 認知心理学

## 学会との連携強化



- ・ ヒューマンインタフェース
- ・ バーチャルリアリティ
- ・ インタラクション
- ・ モバイルコンピューティング
- ・ 触力覚
- ・ 複合現実感
- ・ コンピュータビジョン
- ・ CG

# 認知的コミュニケーション支援に向けた学際拠点の形成と発展

# 大型予算獲得と今後の申請予定

## • 獲得した主な中・大型研究費

- **CRONOS** [川原領域] (2024.10.1-2030.3.31) (日本学術振興会) 「ボディバース：人と内臓とのインタラクション基盤の創成」, 稲見昌彦 (代表), 和田有史 (分担), **計17,400万円**
- 科学研究費補助金 [科研費基盤研究 (A)] (2022.4.1-2027.3.31) (日本学術振興会) 「リカレント時空間次元圧縮を組み込んだヒトのような人工触覚システムの開発」, 野間春生 (代表), **計41,860万円**
- 科学研究費補助金 [科研費基盤研究 (A)] (2025.04.01-2029.03.31) (日本学術振興会) 「ナノエマルジョン技術による植物性脂質・タンパク質の食味改善の基盤の領域横断型研究」, 八十島安伸 (代表), 和田有史 (分担), **計4,615万円**
- 科学研究費補助金 [科研費基盤研究 (A)] (2023-04-01 - 2027-03-31) (日本学術振興会) 「おいしさの認知科学の創出 - 嗅覚と多感覚の統合の解明と伝送技術開発 -」, 和田有史 (代表), **計46,800千円**
- 科学研究費補助金 [科研費基盤研究 (B)] (2022.4.1-2025.3.31) (日本学術振興会) 「計算論的思考育成のための状態空間モデルを用いたプログラミング上の見通しの検知」, 島川博光 (代表), **計1,300万円**
- 科学研究費補助金 [科研費基盤研究 (B)] (2023-04-01-2027-03-31) (日本学術振興会) 「学習者とAIが混在するハイブリッド協同学習環境における相互教授に関する総合的検討」, 林勇吾 (代表), **計18,720千円**
- 科学研究費補助金 [国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化)] (2025.04.01-2027.03.31) (日本学術振興会) 「Cognitive Tutorを導入した協調的学習環境の開発と協同問題解決スキルの日米比較」, 林勇吾 (代表), **計15,470万円**
- 競争的資金 成長型中小企業等研究開発支援事業 <Go-Tech事業> (2022~2024) (経済産業省) 「不足を解消するAI聴診支援クラウドとAI聴診スコープの研究開発」, 島田幸廣 (代表), 島川博光 (分担), **計6,000万円**

## • 今後の申請予定

- JST: RISTEX
- JSPS: 学術変革領域 (A・B)
- JSPS: 基盤 (A)



# 異分野連携に関して

## 総合心理学部と情報理工学部

- 共同研究を実施
- 共著論文による成果発信の例(2025年度)
  - 渡邊咲花, 下條志巖, 木村朝子, 林勇吾「協同時における他者のスキーマがシンクロナイゼーションに与える影響」, 電子情報通信学会, **ヒューマンコミュニケーション基礎 (HCS) 研究会**, (2026年1月)
  - 大津 耕陽・木内 敬太・林 勇吾(2024), 高齢者を対象としたチャットボットによる対話型の心理的支援：解決志向アプローチを用いた実験的検討, **情報処理学会論文誌**, 651151-166
- 受賞：情報処理学会論文誌特選論文賞

## 立命館大学と高齢者施設（はれコーポレーション）

- 高齢者施設でのシステム利用の効果検証
- 研究助成への申請
  - 2024年に申請したJSTの助成では、ヒアリングまで進む

## 立命館大学と米国オクラホマ大学

- 本PJチームと米国の大学との国際共同研究の発足
  - 立命館大学：総合心理学部×情報理工学部
  - オクラホマ大学：社会福祉学部



# 成果発信：

## • 全業績リスト（2021-2025年度）

- <http://www.hayashilab.jp/r-giro/publications/>

## • 査読付き雑誌論文

### • 77件

- 英語論文：31件
- 日本語論文：46件
- **うち、若手研究者の論文：29件**

## • 査読付き国際会議論文

### • 118件

- **うち、若手研究者の論文：60件**



全業績リストはこちら

## 学術論文（査読あり）

1. Sho Isoda, Taro Shimizu, Masashi Hattori, "Associative thinking as a lever for diagnostic creativity," "Diagnosis", De Gruyter Brill, pp.1~7, (2026年3月)
2. 山本博樹, 轟原昭信, 亀井隆幸 「高校「宗教科」教科書に書かれた観望の思想形成過程に関する理解の不振と改善 - 宗門校生徒の既有知識が促す構造方略の使用 - 」, 『日本仏教教育研究』, 日本仏教教育学会, 34巻, pp.1~17, (2026年3月)
3. 山本博樹 「個別学習支援時の説明における理解支援のあり方」, 『学校心理士年報』, 日本学校心理士会, 18巻, pp.1~11, (2026年3月)
4. Koyo Ueno, Hiromitsu Shimakawa, Fumiko Harada, "LLM technologies complex to reduce turnover through improving workplace communication", "Technium Social Sciences Journal", Technium Science, Vol. 80, no. 1 pp.150~161, (2026年2月)
5. Kento Yasuda, Hiromitsu Shimakawa, Fumiko Harada, "Construction of AI learning support model in response to conversation content and emotional changes by EQ", "Technium Social Sciences Journal", Technium Science, Vol. 80, no. 1 pp.35~55, (2026年2月)
6. Hikari Takebayash, Yuji Wada, "Effects of audiovisual temporal synchronization on visual experience of the non-dominant eye", "Cognitive Processing", Springer, Vol. 27, no. 1 pp.121~132, (2026年2月)
7. 山本博樹, 村上高至, 島田英昭 「高1に対する適性形成型支援による構造方略の使用向上が説明理解度と教科理解度に及ぼす影響」, 『立命館教職教育研究』, 立命館大学教職教育推進機構, 13巻, pp.1~11, (2026年2月)
8. Sana Inoue, Kakagu Komazaki, Yuji Wada, Junji Watanabe, "Roactive experiences of vibrotactile stimuli enhance learners' task-specific confidence in cooking skills", "Frontiers in Virtual Reality", Frontiers, Vol. 6, (2026年1月)
9. Fumihiko Nakamura, Yuki Takanaga, Hinata Miyauchi, Yuta Kataoka, Shohei Mori, Fumihisa Shibata, Asako Kimura, "Pen Meets Desk: Above-surface Drawing with Encountered-type Haptics Using an Extendable Pen", "Journal of Information Processing", Information Processing Society of Japan, Vol. 34 pp. 29~38, (2026年1月)
10. Satoshi Hashiguchi, Yuta Kataoka, Asako Kimura, Shohei Mori, "Perceived Weight of Mediated Reality Sticks", "IEEE Transactions on Visualization and Computer Graphics (TVCG)", IEEE press, Vol. 31, no. 1 pp.10573~10582, (2025年12月)
11. 樋口雄大, 黒瀬佳那, 坂口達哉, 橋口哲志, 柴田史久, 木村朝子 「VR/MR空間におけるフットジェスチャーを用いた3Dインタラクション手法の分析・考察」, 『ヒューマンインタフェース学会論文誌』, ヒューマンインタフェース学会, 27巻, 4号, pp.301~312, (2025年11月)
12. Shigen Shimojo, Yugo Hayashi, "Age-related differences in explanatory activities during collaborative learning with concept maps: experimental investigation using epistemic network analysis", "International Journal of Computer-Supported Collaborative Learning", Springer, Vol. 20, no. 4 pp.491~518, (2025年11月)
13. Kento Yasuda, Hiromitsu Shimakawa, Fumiko Harada, "Identifying comprehension faults through word embedding and multimodal analysis", "Advances in Science, Technology and Engineering Systems Journal", ASTES, Vol. 10, no. 6 pp.42~54, (2025年10月)
14. 安陪梨沙, 服部雅史, 林勇吾, 「創造的問題解決における評価予期と人型会話ロボット活用の効果」, 『認知心理学研究』, 日本認知心理学会, 23巻1号, pp.11~28, (2025年9月)
15. Tatsu Kobayakawa, Naomi Gotow, Minako Hosono, Masaki Ohno, Yuki Nishida, Takuji Narumi, Yuji Wada, "Simultaneous measurement of respiratory behavior using three different sensors: pressure transducer-based, belt-type, and thermistor-based methods", "Sensors and Actuators A: Physical", Elsevier, Vol. 391, pp.116632, (2025年9月) (IF=4.9)
16. 田村昌彦, 稲澤康弘, 野中朋美, 江原浩一郎, 堀口逸子, 松原和也, 上田彩子, 和田有史, 「食品添加物に対する認識改善教材の開発と効果の検討」, 『日本食育学会誌』, 日本食育学会, 19巻3号, pp.119~129, (2025年7月)

# 研究の成果

## ・インパクトのある学術雑誌論文

### ・ 国際誌

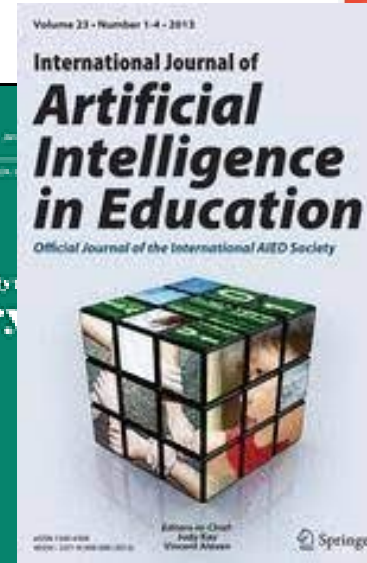
- IEEE Trans. on Visualization and Computer Graphics (TVCG)
- International Journal of Artificial Intelligence and Education
- Perception
- Learning and Instruction
- Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognitionなど

### ・ 国内誌

- 認知科学
- 情報処理学会論文誌
- 日本バーチャルリアリティ学会論文誌
- ヒューマンインタフェース学会論文誌
- システム制御情報学会
- 基礎心理学研究など



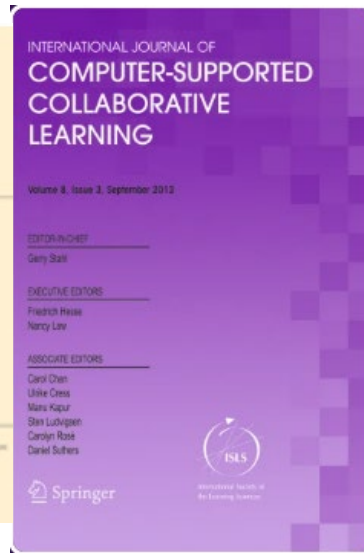
IF = 3.14



IF = 4.9



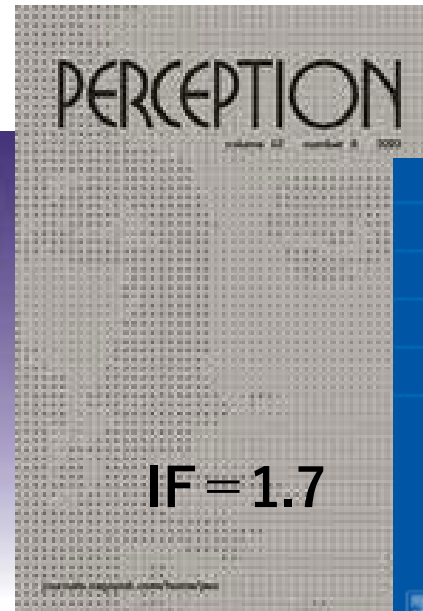
IF = 4.9



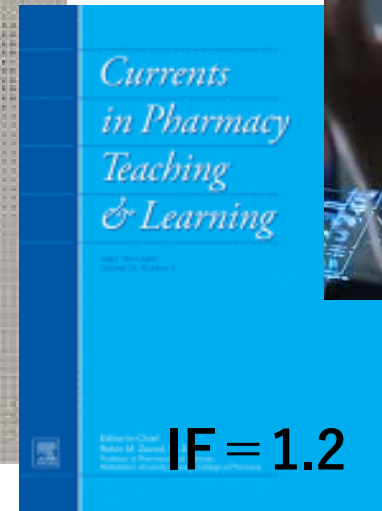
IF = 5.7



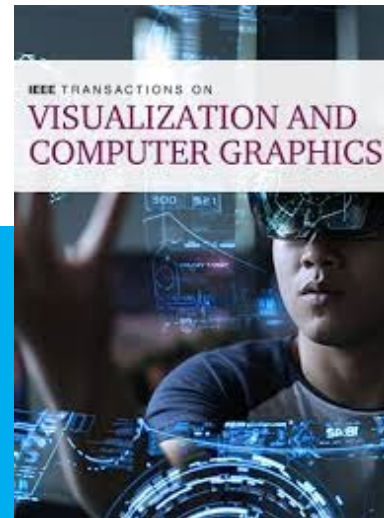
IF = 1.09



IF = 1.7



IF = 1.2



IF = 5.22

# メディア報道など

## VRで会話 認知症予防

### はれコーポ、立命館大と実証

有料老人ホーム運営などを手掛けるはれコーポレーション(岡山市)は仮想現実(VR)を用いた新しい高齢者支援を模索する。立命館大学の産学連携プロジェクトの一環で、実証実験の場の提供や知見の共有に取り組み。研究支援を認知症予防などに生かし、介護施設としての独自サービス強化にもつなげる。

プロジェクトは心理学や情報工学の専門家が運

### チャットGPT活用 介護現場の負担軽減



はれコーポの介護施設でVRを使った実証実験を始めた

携し、高齢者のコミュニケーション支援システムの開発を目指している。将来的には構築した認知モデルや情報通信システムを、高齢者支援ロボットやアプリなどの開発に生かす。

はれコーポが運営する京都市の有料老人ホーム「あいらの杜(もり)京都桃山」で2月から実証実験が始まった。入居者はVRゴーグルをかぶり、画面上のキャラクターと会話をする。

対話型のAI(人工知能)「Chat(チャット)GPT」などを活用し、キャラクターが入居者に質問する。たとえば「もし奇跡が起きたら何が変わるか」という質問では、実現したときの状況を入居者に具体的にイメージしてもらう。

複数週に渡って実験し、個人々の想起する記憶の種類の違いや時系列的な変化を解析する。これにより高齢者の認知や行動を理解する認知モデ

ルの精度が高まり、効果的な支援に役立てられるという。認知症の予防効果もあわせて検証していく。

プロジェクトリーダーを務める立命館大学総合心理学部の林勇吾教授は「高齢者施設や病院で使ってもうために、現場でのデータ収集には大きな意義がある」と話す。

1年後をめどに一定の成果を公開する予定だ。

はれコーポの上川敏敬社長は「認知症や寝たきりの方など、入所する色

々な状況の方にアプローチしてもらえると話す。同社が運営する施設ごとに有効性の違いなどを検証することで、より幅広く使えるシステムの構築も可能とみている。

高齢化により要介護者が増え、介護業界の人手不足は深刻化している。厚生労働省によると23年10月時点の介護職員数は前年比2・9万人減で、介護保険制度が始まった00年度以来初めて減少した。最新技術の活用などで、より少ない人手で十分な介護サービスを提供できる体制づくりが急務となっている。

認知症予防には幸せだった思い出を話してもらった「回想法を用いた傾聴」が有効であることが知られるが、職員が一人で多

くの入居者の相手をすることは難しい。

VRであればゴーグル1台で多くの入居者のカウンセリングが可能で、現場の負担軽減にもつながる。過疎地や離島などの高齢者へのオンライン対応も視野に入る。

はれコーポは大学や企業と連携し、入居者やその家族、施設職員などあらゆる関係者に役立つサービスの創造に取り組み方針を掲げる。

同社は「今回の研究成果が、自社の介護施設で新たなサービスのひとつとなることを期待している」とする。介護施設の運営者としての知見を共有することで新たなサービスを生み出し、競争力の強化につなげたい考えだ。

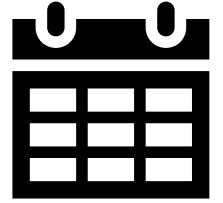
(D) まとめ

# 目標に対する達成状況の自己評価

- 異分野融合型プロジェクト：**達成**
  - 情報理工学部と総合心理学部による新たな組織作り
  - 異分野共同研究の遂行
- 若手研究者の育成：**達成**
  - ハイインパクトジャーナルへの掲載
  - 新たなポストを獲得
- 研究成果の発信：**達成**
  - 国際誌などのハイインパクトファクターへの掲載
- 予算獲得：**達成**
  - 基盤A・B・国際共同研究強化など
- 社会実装：**今後の課題**
  - 高齢者施設での恒常的なシステム利用
- 国際的展開：**今後の課題**
  - 海外の施設での利用に向けた大学・機関との連携



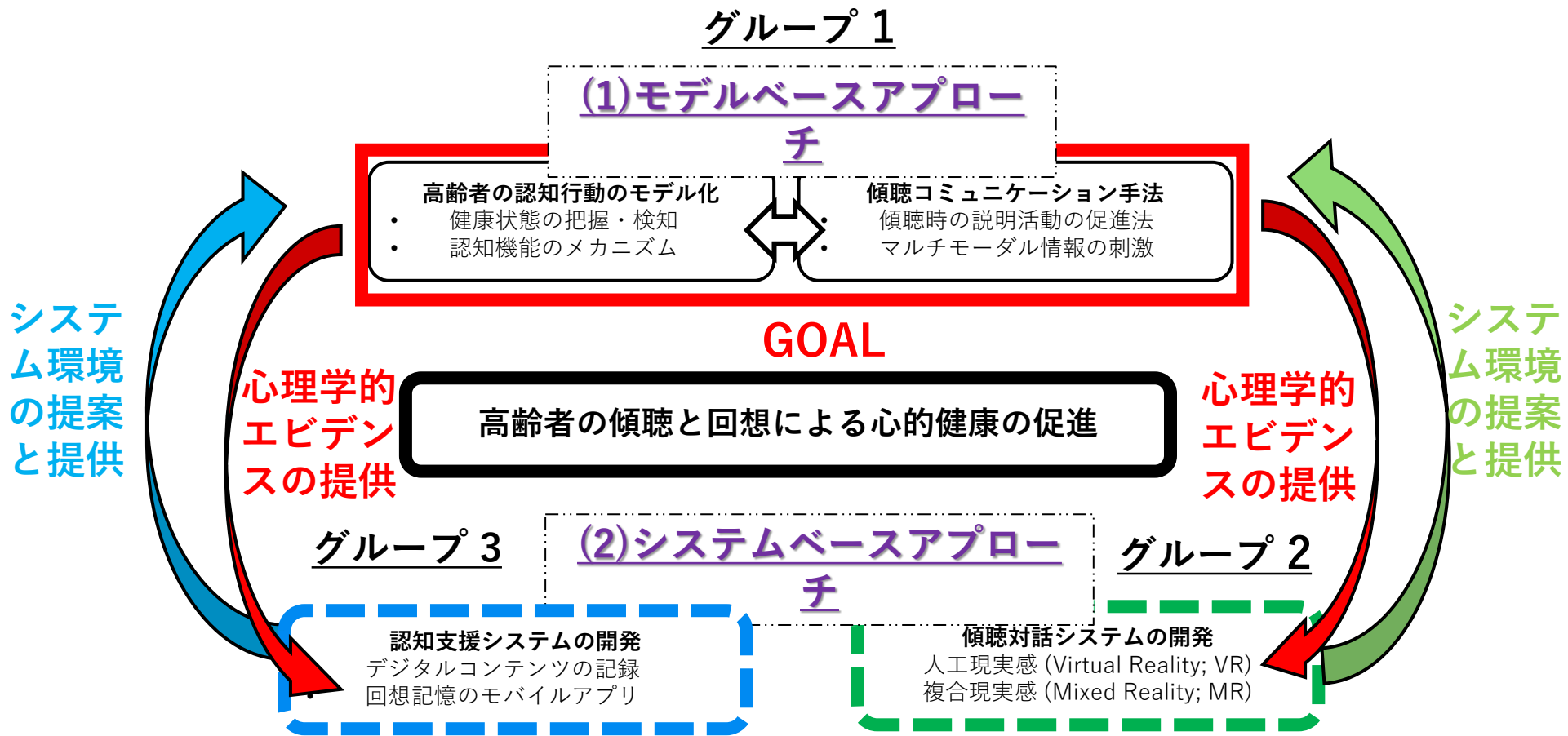
# 今後の課題と予定



- 異分野融合研究の推進
  - 認知モデリングを軸としたシステム開発と実証実験の実施
  - 分業的・相互補完的な研究体制の確立
- 社会実装
  - 高齢者施設でのシステム利用・データ収集
  - 国外での展開, ユニバーサルデザイン
- 国際共同研究
  - 欧米の大学との国際共同研究
- 大型予算の獲得
  - JSTやJSPSなど
- 若手研究者の育成
  - ハイインパクトファクター論文執筆支援
  - 研究費取得支援

# (E) 組織体制

# 心理学モデルと情報システムの融合



## (G1) 認知モデルの構築と傾聴手法の検討

グループリーダー/ チームリーダー(G1T3)	林 勇吾	立命館大学総合心理学部
チームリーダー(G1T1)	山本博樹	立命館大学総合心理学部
チームリーダー(G1T2)	島川博光	立命館大学情報理工学部
チームリーダー(G1T4)	木村朝子	立命館大学情報理工学部
プロジェクトメンバ(G1T1)	服部雅史	立命館大学総合心理学部
プロジェクトメンバ(G1T1)	和田有史	立命館大学食マネジメント学部
プロジェクトメンバ(G1T3)	森田純哉	静岡大学情報学部
プロジェクトメンバ(G1T3)	横光健吾	人間環境大学総合心理学部
プロジェクトメンバ(G1T3)	大津耕陽	立命館大学情報理工学部
プロジェクトメンバ(G1T3)	王 凱	立命館大学グローバル・イノベーション研究機構
プロジェクトメンバ(G1T3)	木内敬太	独立行政法人労働者健康安全機構/立命館大学グローバル・イノベーション研究機構
プロジェクトメンバ(G1T3)	濱田大佐	京都大学文学部/立命館大学グローバル・イノベーション研究機構
プロジェクトメンバ(G1T3)	下條志巖(RA)	立命館大学人間科学研究科/立命館大学グローバル・イノベーション研究機構
プロジェクトメンバ(G1T3)	安陪 梨沙(RA)	立命館大学人間科学研究科//立命館大学グローバル・イノベーション研究機構

## (G2) VR/MR環境におけるインタラクション分析

グループリーダー(G2T3)/ チームリーダー	木村朝子	立命館大学情報理工学部
チームリーダー(G2T1)	柴田史久	立命館大学情報理工学部
チームリーダー(G2T2)	野間春生	立命館大学情報理工学部
チームリーダー(G2T4)	林 勇吾	立命館大学総合心理学部
プロジェクトメンバ(G2T3)	松室美紀	The Pennsylvania State University
プロジェクトメンバ(G2T3)	橋口哲志	立命館大学グローバル・イノベーション研究機構
プロジェクトメンバ(G2T3)	森 尚平	The Institute of Computer Graphics and Vision at Graz University of Technology

## (G3) 記憶の想起を促すシステムの開発と検証

グループリーダー/ チームリーダー(G3T3)	泉 朋子	立命館大学情報理工学部
チームリーダー(G3T1)	林 勇吾	立命館大学総合心理学部
チームリーダー(G3T2)	西原陽子	立命館大学情報理工学部
プロジェクトメンバ(G3T3)	北村尊義	立命館大学情報理工学部
プロジェクトメンバ(G3T3)	山本知仁	金沢工業大学
プロジェクトメンバ(G3T3)	石井 裕	岡山県立大学
プロジェクトメンバ(G3T3)	清家理	立命館大学スポーツ健康科学部
プロジェクトメンバ(G3T3)	大津耕陽	立命館大学情報理工学部
プロジェクトメンバ(G3T3)	安藤雅行	立命館大学グローバル・イノベーション研究機構

# (F)若手人材育成状況

# 若手研究者育成と進路

2026年4月1日付



**下條 志蔵**

→現：OIC総研専門研究員  
本学博士後期課程大学院修了  
(2024年度-2025年度)  
R-GIRO 専門研究員G1(2024-2025)



**橋口 哲志**

→現：立命館大学デザイン・アート学部 准教授  
R-GIRO特任准教授G2(2023年度-2025年度)



**安陪梨沙**

→現：立命館大学総合心理学部 特任助教  
R-GIROリサーチアシスタント G1  
博士後期課程大学院生  
(2023年度-2025年度)



**渡邊 咲花**

→現：RARAアソシエイトフェロー RA  
R-GIROリサーチアシスタント G1  
博士後期課程大学院生  
(2024年度-2025年度)



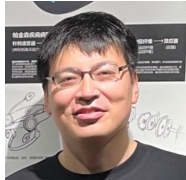
**安藤 雅行**

→現：関西大学ビジネスデータサイエンス学部 助教  
R-GIRO専門研究員G3  
(2022年度-2025年度)



**河村 竜幸**

→現：京都イノベーション株式会社 代表取締役  
R-GIRO補助研究員G1  
(2023年度-2025年度)



**王 凱**

→現：武漢工科大 教授  
OIC総研客員協力研究員G1  
(2024年度)  
R-GIRO 専門研究員G1(2023)



**木内 敬太**

→現：独立行政法人労働者健康安全機構  
OIC総研客員協力研究員G1  
(2021年度-2025年度)



**アルサーテ クルツ クリスチャン**

→現：ホンダ・リサーチ・インスティテュート (HRI)  
研究教員・助教(2022年度)G2



**西田 勇樹**

→現：BKC社系研究機構 助教  
R-GIRO客員研究員(2022年度)G1



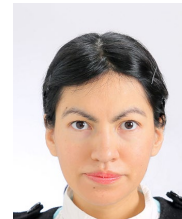
**田村 昌彦**

→現：聖カタリナ大学 教授  
R-GIRO専門研究員(2021年度)G1



**濱田 大佐**

→京都大学文学部 特定研究員  
→大手前大学 講師 2024~  
研究教員・助教(2022年度)G1



**シャナット バルガス メサ**

→現：京都大学医学部 特定研究員  
専門研究員(2022年度)G1



**シュレンベル レナ**

→現：東北大学 大学院教育学研究科 助教  
客員協力研究員(2022年度)G1



**大津 耕陽**

→現：青山学院大学 助教  
R-GIRO専門研究員(2021年度)G3

# 氏名：下條 志巖



- R-GIRO在籍時の所属と職位：立命館グローバル・イノベーション研究機構・専門研究員
- 2026年度の勤務先（就職）：OIC総合研究機構・専門研究員
- 主な研究業績(2021-2025)：
  - Shimojo, S., Hayashi, Y. (2025) Age-Related Differences in Explanatory Activities during Collaborative Learning with Concept Maps: Experimental Investigation Using Epistemic Network Analysis, *International Journal of Computer-Supported Collaborative Learning*, 20, 491-518. <https://doi.org/10.1007/s11412-025-09456-5>
  - Shimojo, S., Wang, K., Kiuchi, K., Shudo, Y., Hayashi, Y. (2026) Solution-Focused Embodied Conversational Agent for Older Adults: An Experimental Study on the Impact of Agent Impression, *Proceedings of the 21st ACM/IEEE International Conference on Human-Robot Interaction (HRI2026)*, 665-669. <https://doi.org/10.1145/3776734.3794479>

# 氏名：橋口 哲志



- R-GIRO在籍時の所属と職位：立命館グローバル・イノベーション研究機構・准教授
- 2026年度の勤務先（就職）：立命館大学デザイン・アート学部・准教授
- 主な研究業績(2021-2025)：
  - Hashiguchi, S., Kataoka, Y., Kimura, A., Mori, S. (2025). Perceived Weight of Mediated Reality Sticks. *IEEE Transactions on Visualization and Computer Graphics (TVCG)*, 31(1), 10573-10582. <https://doi.org/10.1109/TVCG.2025.3591181>
  - 樋口雄大・黒瀬佳那・坂口達哉・橋口哲志・柴田史久・木村朝子 (2025). VR/MR空間におけるフットジェスチャを用いた3Dインタラクション手法の分析・考察. *ヒューマンインタフェース学会論文誌*, 27(4), 301-312. [https://doi.org/10.11184/his.27.4\\_301](https://doi.org/10.11184/his.27.4_301)

# 氏名：安藤 雅行



- R-GIRO在籍時の所属と職位：立命館グローバル・イノベーション研究機構・専門研究員
- 2026年度の勤務先（就職）：関西大学ビジネスデータサイエンス学部・助教
- 主な研究業績(2021-2025)：
  - 安藤雅行, 大津耕陽, 泉 朋子, (2024) 対話エージェントへの親要素の導入：日常体験に関する定期的な振り返り支援に向けて, ヒューマンインタフェース学会 ヒューマンインタフェース学会論文誌. 26(2), 169-184. [https://doi.org/10.11184/his.26.2\\_169](https://doi.org/10.11184/his.26.2_169)
  - Ando, M., Otsu, K., Izumi, T. (2024) Enhancing Episodic Memory Recall Through Nostalgic Image Generation and Interactive Modification. *In Proceedings of 26th International Conference on Human Computer Interaction (HCI2024)*, 247-261 [https://doi.org/10.1007/978-3-031-60405-8\\_16](https://doi.org/10.1007/978-3-031-60405-8_16)
  - Ando, M., Otsu, K., Izumi, T. (2023) The Impact of Parent-like Chatbot Narratives on Daily Reflection. *In Proceedings of 25th International Conference on Human Computer Interaction (HCI2023)*, 279-293. [https://doi.org/10.1007/978-3-031-35602-5\\_21](https://doi.org/10.1007/978-3-031-35602-5_21)

# 氏名：安陪梨沙



- R-GIRO在籍時の所属と職位：立命館大学人間科学研究科・博士課程後期課程大学院生
- 2026年度の勤務先（就職）：立命館大学総合心理学部・特任助教
- 主な研究業績(2021-2025)：
  - 安陪 梨沙・服部 雅史 (2023). 概念合成課題の創造性に対するアドホックカテゴリ想起の影響 認知科学, 30(3), 365–369.  
<https://doi.org/10.11225/cs.2023.020>
  - 安陪 梨沙・服部 雅史・林 勇吾 (2025). 創造的問題解決における評価予期と人型会話ロボット活用の効果 認知心理学研究, 23(1), 11–28.  
<https://doi.org/10.5265/jcogpsy.2504>